べコニヤの白きが一つ落ちにけり土に流れて
涼しき朝を

寢臺の下のくらきを拂ふこともなく看護婦のよひごとに吊りければ蚊帳の中に蚊おほくなりて、此の夜もうつらうつらとしてありけるほどふけゆくままに一しきり襲ひきたれるに驚く

ひそやかに螫さむと止る蚊を打てば手の痺れ居る暫くは安し

聲掛けて耳のあたりにとまる蚊を血を吸ふ故に打ち殺しけり

七月一日、朝まだきにはじめて草履はきておりたつ、樗内に稍ひろき松林あり、近く海をのぞむ

月見草萎まぬほどと蛙鳴くころをたづねて松の木の間を

柵の外には畑ありて南瓜つくることおほし、我酷だこの花を愛す

ただひとり南瓜畑の花みつつこころなく我は鼻ほりて居つ

前後に人もなければ心も潤き松の林に白き浴衣きたりけることの故はなくして唯矜りかにうれしく

朝まだきまだ水つかぬ浴衣だに涼しきおもひ
松の間を行く

ただ一つ松の木の間に白きものわれを涼しと
膝抱き居り

ころぶしてみれば梢は遙かなり松かさが動く
その雀等は

松かげの蚊帳釣草にころぶしていささか痒き
足のばしけり

かくのごと頻すりつけてうなづけば蚊帳釣草
も懐しきかも

窓外

ぽぷらあと夾竹桃とならびけり甍を越えてぽ
ぷらあは高く

四日深更、月すさまじく冴えたり

硝子戸を透して蜩に月さしぬあはれといひて
起きて見にけり

小夜ふけて竊に蚊帳にさす月をねむれる人は
皆知らざらむ

さやさやに蜩のそよげばゆるやかに月の光は
ゆれて涼しも

日さめてさまざまのことを思ふ

かかるとき扁蒲畑に立ちなばとおもひてもみつ今は外に出でず

七日

よひよひに必ずゆがむ白蚊帳に心落ちゐて眠るこのごろ

白蚊帳に夾竹桃をおもひ寄せ只こころよくそ
の夜ねむりき

厠はしきは蠣の中の蚊なり

はかなくもよひよひ毎に蚊の居らぬ蠣なれか
しとおもひ乞ひのむ

鍼の如く　其四

一

七月十七日、樗内の松林を徜徉す、煤煙のためなればか、梢のいたく枯燥せるが如きをみる

油蟬乏しく松に鳴く聲も暑きが故に嗄れにけらしも

いづれの病棟にもみな看護婦どもの其詰所といふものの窓の北陰にささやかなる箱庭の如きをつくりてくさぐさの

草の花など植ゑおけるが、夕毎に三四人づつおりたちて砂なれば爪こまかなる熊手もて掃き清めなどす、十九日のことなり

水打てば青鬼灯の袋にもしたたりぬらむたそがれにけり

かかる時女どもなればみなみなさざめきあへるが、ひとり我がために撫子の手折りたるをくれたれば

牛の乳をのみてほしたる壜ならで挿すものもなき撫子の花

此のをみなすべてのものの中に野にあるなでしこを第一に好めるよしいひければ

なでしこの交れる草は悉くやさしからむと我がおもひみし

壜に活けたるままにして

なでしこの花はみながらさきかへて幾日へぬらむ水減りにけり

撫子はいまに果敢なき花なれど捨つと言にいへばいたましきかも

二十日の夜ひとつには暑さたへがたくして夜もすがら眠らず、明方にいたりて蛙の聲を聞く

快くめざめて聽けと鳴く蛙ねられぬ夜のあけにのみきく

さわやかに鳴くなる蛙たとふれば豆を戸板に轉(ころ)ばすがごと

朝のうち必ず一しきりはげしく咳出づることありて苦しむ

曉の水にひたりて鳴く蛙すずしからむとおもひ汗拭く

二

蚊帳釣草を折りて

暑き日はこちたき草をいとはしみ蚊帳釣草を活けてみにけり

こころよく汗の肌にすず吹けば蚊帳釣草の髭そよぎけり

夜になれば我がためにのみは必ず看護婦の來て蚊帳をつりてくるるが例なり

蚊帳釣るとかやつり草を外に置くが務めなりける我は痩せにき

燬くが如き日てりつづけばすべての病

室のつきそひの女ども唯洗濯にいそがはし

粥汁を袋に入れて糊とると絞るがごとく汗はにじめり

おもひ待てども蟬の聲をきかず

板のごと糊つけ衣夕まけて松に乾けど蟬も鳴かぬかも

庭の松の陰に午後に成れば朝顔の鉢をおくものあり他の病室の患者の慰めなりといへどもひとの枕のほとり心づかざれば未だみしともなく

朝まだき涼しき程の朝顔は藍など濃くてあれなとぞおもふ

僅に凌ぎよきは朝まだきのみなり

蚤くひの趾などみつつ水をもて肌拭くほどは涼しかりけり

夕に汗を流さんと一杯の水を被りて

糊つけし浴衣はうれし蚤くひのこちたき趾も洗はれにけり

涼味漸く加はる

松の木の疎らこぼるる暑き日に草みな硬く秋づきにけり

三

二十三日久保博士の令妹より一莖の桔梗をおくらるる枕のほとり俄に蘇生せるがごとし

ささやけきかぞの白紙爪折りて桔梗の花は包まれにけり

桔梗の花ゆゑ紙はぬれにけり冷たき水のしたたれるごと

桶などに活けてありける桔梗をもたせりしかば紙はぬれけむ

日をつぶりてみれば秋既に近し

白埴の瓶に桔梗を活けしかば冴えたる秋は既にふふめり

しらはにの瓶にさやけき水吸ひて桔梗の花は引き締りみゆ

桔梗を活けたる水を換へまくは肌は涼しき曉にしあるべし

我は氷を嚙むことを好まざれど

暑き日は氷を口にふくみつつ桔梗は活けてみるべかるらし

氷入れしつめたき水に汗拭きて桔梗の花を涼しとぞみし

すべもなく汗は衣を透せどもききやうの花は
みるにすがしき

廿四日の夕、偶々柵をいでて濱邊に行く、群れ居る人々と草履ぬぎて淺き波に浸る、空の際には暗紫色の霧の如きが棚引きたるに大なる日落ち懸れり、凝視すれども眩からず、近くは雨をみざる兆なり

抱かばやと沒日のあけのゆゆしきに手圓ささげ立ちにけるかも

渚を遠く北にあたりて葦茂りて草もおひたれば行きて探りみんと思へどこのあたり嘗て撫子をみずといひにければ

おしなべて撫子欲しとみえも・せぬ顏は憂へず
皆たそがれぬ

構内にレールを敷きたるは濱へゆくみちなり雜草あまた茂りて月見草ところどころにむらがれり一夜鑫蘭をきく

石炭の屑捨つるみちの草むらに秋はまだきの
きりぎりすなく

きりぎりすきかまく暫し臀据ゑて暮れきとば
かり草もぬくめり

きりぎりすきこゆる夜の月見草おぼつかなく
も只ほのかなり

白銀の鍼打つごときぎりぎりす幾夜はへなば
涼しかるらむ

月見草けぶるが如くにほへれば松の木の間に
月缺けて低し

八月一日、病棟の陰なる朝顔三日ばかり
このかた漸くに一つ二つとさきいづ

嗽ひしてすなはちみれば朝顔の藍また殖えて
涼しかりけり

三日夕、整形外科の教室の陰に手をたて
ておびただしく絡ませたるをはじめて
知る、餘りに日に疎ければ。

朝顔の赤は萎まずむき捨てし瓜の皮など乾く
夕日に

四日

あさがほの藍のうすきが唯一つ縋りてさびし
小雨さへふり

彼の垣根のもとに草履はきておりたつ
朝顔のかきねに立てばひそやかに睫にほそき
雨かかりけり

六日

かつかつも土を偃へたる朝顔のさきぬといへ
ば只白ばかり

鍼の如く　其五

一

八月十四日、退院

あさがほは蔓もて偃へれおもはぬに榊の枝に
赤き花一つ

十六日朝、博多を立つ、日まだ高きに人吉に下車し林の温泉といふにやどる、暑さのはげしくなりてより身はいたく疲れにたりけるを俄かに長途にのぼりたることなれば只管に熱の出でんことをのみ恐れて

手を當てて心もとなき腋草に冷たき汗はにじみ居にけり

十八日、日向の小林より乘合馬車に身をすぼめてまだ夜のほどに宮崎へ志す

草深き垣根にけぶる烏瓜にいささか眠き夜は明けにけり

霧島は馬の蹄にたててゆく埃のなかに遠ぞきにけり

十九日、宮崎より南の方折生迫といふに

いたる、青島目睫の間に横はりてうるはしけれど、此の日より驟雨いたりてやがて連日の時化に變りたれば、心落ち居る暇もなきに漁村のならはし食料の蓄もなければ

かくしつつ我は痩せむと茶を掛けて硬(こは)き飯はむ豈うまからずや

酢をかけて咽喉こそばゆき芋殼の乏しき皿に箸つけにけり

二十五日に入りて、雨は更に戸を打つこと劇しくして止むべきけしきもなし

痺れたる手枕解きて外をみれば雨打ち亂し潮の霧飛ぶ

嚙(か)みさ嚙(が)み疾風(はやち)は潮をいぶく處(ど)に衣も疊もぬれにけるかも

二十六日、漸くにして晴る、宿は松林のほとりに獨離れて建てられたるが、道も庭も松葉散り敷きてあたりは狼藉たり

木に絡む絲瓜の花も此の朝は萎えてさきぬ痛みたるらむ

おなじく松林のほとり、少し隔てて壁くづれ落ちてかつかつも住みなしたるあり、けさは殊に凄じきさまに

しめりたる松葉を竈(くど)に焚くけぶり絲瓜の花に
まつはりてけぬ

二十七日、宮崎にのがる、明くれば大淀川のほとりを徜徉ふ

朝まだきすずしくわたる橋の上に霧島ひくく
沈みたり見ゆ

三十一日、内海の港より船に乘りて吹毛井といふところにつく、次の日は朝の程に鵜戸の窟にまうでて其の日ひと日は樓上にいねてやすらふ

手枕に疊のあとのこちたきに幾ときわれは眠
りたるらむ

懶き身をおこしてやがて呆然として遠
く日を放つ

うるはしき鵜戸(うと)の入江の懷にかへる舟かも沖
に帆は滿つ

渚にちかく禮を掩ひて一樹の松そばだ
ちたるが、枕のほとりいつしか落葉のこ
ぼれたるをみる

松の葉を吹き込むかぜの涼しきに咽びてわれ
はさめにけらしも

二日、油津の港へつきて更に飫肥にいた
る、枕流亭にやどる、禰のもと僅に芋をつ
くりたるあり心を惹く

ころぶせば枕にひびく淺川に筆洗ふ子もが月
白くうけり

四日、油津の港より乘りて外の浦といふころへわたる、漸くにして探しあてたるはわびしき宿なれども靜かなる入江もみえたれば、もとより戸は立てしめず、闕の際に枕したれば月はまどかにして蚊帳のうちをうかがふ

蜩越しに雨のしぶきの冷たきに二たびめざめ
明けにけるかも

六日、波荒き海上を折生迫の漁村にもどる、此の夜おもひつづくることありてふくるまで眠らず

草に棄てし西瓜の種が隱りなく松蟲きこゆ海
の鳴る夜に

八日、陰晴定めなき季節のならはし、雨をりをりはげしく障子を打つ

横しぶく雨のしげきに戸を立てて今宵は蟲は
きこえざるらむ

九日、再び時化になりたればまた宮崎にのがる、人のもとにて梨瓜といふを皿に盛りてすすめらる、此の地方西瓜を產することおびただし

瓜むくと幼き時ゆせしがごと堅(たた)さに割かば尙
うまからむ

十三日、漸く折生迫にもどれば同人の手紙などとどきて居たるを一つ一つと披きみてはくりかへしつつ

とこしへに慰もる人もあらなくに枕に潮のを
らぶ夜は憂し

むらぎもの心はもとな遮莫(さもあれはあれ)をとめのことは
暫し語らず

夜は苦しき眠りに落つるまで蟲の聲々あはれに懷しく

こほろぎのしめらに鳴けば鬼灯(ほほづき)の庭のくまみ
をおもひつつ聽く

こほろぎはひたすら物に怖れどもおのれ健か
に草に居て鳴く

十四日

蝕ばみてほほづき赤き草むらに朝は嗽ひの水
すてにけり

午に近くたまたま海岸をさまよふ

草村にさける南瓜の花共に疲れてたゆきこほ
ろぎの聲

海もくまなく晴れたれば、あたりは、只一

時に目をひらきたるがごとし

鯛とると舟が帆掛けて亂れれば沖は俄かに濁くなりにけり

豐後國へわたる船を待たむと此の日内海にいたりてやどる

此の宵はこほろぎ近し廚なる笊の菜などに居てか鳴くらむ

十八日、昨日別府の港につきてけふは大分の郊外に石佛を探り汗流して歸れるに、夕近くなりて慌しく肌衣とりいだす

こころよき刺身の皿の紫蘇の實に秋は俄かに冷えいでにけり

二

二十二日、博多なる千代の松原にもどりて、また日ごとに病院にかよふ

此のごろは淺蜊淺蜊と呼ぶ聲もすずしく朝の嗽ひせりけり

三十日、雨つめたし、百穗氏の秋海棠を描きたる葉書とりいだしてみる。庭にはじめてさけりとあり

うなだれし秋海棠にふる雨はいたくはふらず只白くあれな

いささかは肌はひゆとも單衣きて秋海棠はみるべかるらし

ゆくりなくも宿のせまき庭なる朝顔の垣をのぞきみて

秋雨のひねもすふりて夕されば朝顔の花しぼまざりけり

十月一日、庭のあさがほけさは一つも花をつけず

朝顔の垣はむなしき秋雨をわびつつけふもまたいねてあらむ

病院の門を入りて懐しきは、只雞頭の花のみなり

雞頭は冷たき秋の日にはえていよいよ赤く冴えにけるかも

十日、再び秋草のたよりいたる、萎えたるこころしばらくは慰む

苅萱と秋海棠とまじりぬと未だはみねどかなひたるべし

わびしくも痩せたる草の苅萱は秋海棠の雨ながらみむ

日ごろは熱たかければ、日れもす蒲團引き被りてのみ苦しみける程に、もとより入浴することもなかりけるが、たまたま十八日の朝まだき、まださくやらむと朝

顔のあはれに小さくふふみたる裏戸を
あけていでゆく

浴(ゆあ)みして手拭(てぬぐひ)ひゆる朝寒みまだつぼみなりそ
のあさがほは

小さき蚊帳のうちに獨りさびしく身を
横たふるは常のならはしにして、また我
が好むところなるにましてここは藪蚊
のおほきところなれば只いつまでも吊
らせてありけるが

幾夜さを蚊帳に別れてながき夜のほのかに愁
し雨のふる夜は

古蚊帳のひさしく吊りし綻びもなかなかいま
は懷しみこそ

三

吸入室の窓のもとに、一坪ばかり庭の砂
搔きよせて苗を挿してありけるが、夏の
日にも枯れず、秋もたけて漸く一尺餘り
になりたればいまは日ごとに目につく
やうになりけるを、十一月十一日、折から
時雨の空搔きくもりて騒がしきに

はらはらと松葉吹きこぼす狹庭には皆白菊の
花さきにけり

次の日、庭は熊手もてくまもなく掻きはらはれたれど

白菊のまばらまばらはおもしろくこぼれ松葉を砂のへに敷く

十四日、夜にいりて雨やまざれど俄に思ひ立つことありて久保博士をおとなふ

しめやかに雨の淺夜を籠ながら山茶花のはなこぼれ居にけり

俄に九度近くのぼりたる熱さむることもなく、三十日ばかりの間は只引きこもりてありければ、常に季節に疎しともおもはざりける身の山茶花の花をみるこ

とはじめてなればいま更のごとく驚かれぬるに

吸物にいささか泛けし柚子の皮の黄に染みたるも久しかりけり

幾時なるらむ、めざめて雨のはげしきおとをきく

松の葉は復たこぼるらし小夜ふけて廂に雨の當るをきけば

十五日、ふと彼十坪に足らぬ裏の庭を見下すに、そこにも若き木の一本はありて

ひそやかに下枝ばかりにひらきたる山茶花白くこぼれたり見ゆ

山茶花はさけばすなはちこぼれつつ幾ばく久
にあらむとすらむ

十六日、このごろ熱低くなりたれば、始めて人をたづねていづ、空晴れて快し

不知火の國のさかひにうるはしき背振の山は
暖かに見ゆ

ひとの垣に添うてゆく

山茶花はあまたも散れば土にして白きをみむ
に垣内には立つ

雀の好む木なればか必ずさへづりかはすをみる

山茶花に雀はすだくときにだに姿うつくしく
あれなとぞおもふ

わかき女のさげもてゆくものを

手に持てる茶の木の枝に括られて黄に凝りた
る草の花何

十九日、復たいでありく、朱欒の青きがそこここの店に置かれてまだ一つ二つは残りたらむとおもふに、梢に垂れたるは皆既にいろづきたるにおどろく

竿に釣りて朱欒のうへの白足袋は乾きたるら
し動きつつみゆ

二十二日、觀世音寺にまうでんと宰府よ

り間道をつたふ

稲扱(こ)くとすてたる藁に霜ふりて梢の柿は赤くなりにけり

彼の蒼然たる古鐘をあふぐ、ことしはまだはじめてなり

手を當てて鐘はたふとき冷たさに爪叩き聽く其のかそけきを

住持は知れる人なり、かりのすまひにひとしき庫裏なれども猶ほ且かの緣のひろきを憾む

朱欒植ゑて庭暖き冬の日の障子に足らずいまは傾きぬ

二十五日、氣候激變してけさもはげしき北吹きてやまず、ささやかなる店に蔬菜のうれのこりたるも哀れなり

うるほへば只うつくしき人參の肌さへ寒くかわきけるかも

二十六日、百穗氏の來狀に接す、寒雲低く垂れて庭に落葉を焚くなどあり

幾ばくの落葉にかあらむ掃きよせて竈(くど)には焚かず庭にして焚く

落葉焚きて寒き一夜の曉は灰に霜置かむ庭の土白く

二十九日、筑後國なる松崎といふところに人をたづぬることありてつとめて立つ、おもはぬ霜ふかくおりたるに此の如きは冬にいりてはじめてなりといふ

芒の穂ほけたれば白しおしなべて霜は小笹にいたくふりにけり

此の日或る禪寺の庭に立ちて

枳棋(けくほなし)ともしく庭に落ちたるをひらひてあれど咎めても聞かず

たまたまは榾の楔(くさび)をうちこみて樅(もみ)の板挽く人もかへりみず

十二月七日、程ちかく槭をおほく植ゑたるあり、けふは塀の外に散り敷ける落葉を掃きて、松葉のまじりたるままに火をつけて燒く

そこらくにこぼれ松葉のかかりゐる枯枝も寒し落葉焚く日は

いささかの落葉が燒くるいぶり火に烟は白くひろごりにけり

夜にいりて空俄に凄じくなりたれば戸ははやく立てさせて

時雨れ來るけはひ遙かなり焚き棄てし落葉の灰はかたまりぬべし

八日

松の葉を繩に括りて賣りありく聲さへ寒く雨はふりいでぬ

朝まだき車ながらにぬれて行く菜は皆白き莖さむく見ゆ

四

大正三年六月八日、山崎をすぎて雨おほいに到る

天霧(あまぎ)らふ吹田(すんだ)茨木雨しぶき津の國遠く暮れにけるかも

九日、三たび播州を過ぐ

播磨野は朝すがしき淺霧の松のうへなる白鷺の城

同二年四月十五日夕、空には朝來の雨なごりもなく、汽車はこころよく伯耆の海岸に添うて走る

そがひには伯耆嶺白く晴れたればはらに泛ける隱岐の國見ゆ

十七日、出雲の杵築にいたり大社に賽す、其の本殿の構造、簡易にして素朴なれどもしかもこれを仰ぐに彼の大國主の天

の瓊矛を杖いて草昧の民の上に君臨せる俤を只今目前にみるのおもひあり

久方の天が下には言絶えて嘆きたふとび誰かあふがざらむ

十九日、よべはおそく香住といふところにやどりて、應擧の大作をみむとつとめて大乘寺を訪ふ

菜の花をそびらに立てる低山は櫟がしたに雪はだらなり

補遺

歌會の歌

庭の隅に蒔きたる桃の芽をふきて三とせになりて乏しき咲きぬ（四月例會席上四首）

夜になれば星あらはれて晝になれば星消え去りて月日うつり行く

もののけの三つ目一つ目さはにありと聞けどもいまだ見し事のなき

木の枝にとまれる鳥のとまり居て逃ぐる事もなし鳴く事もなし（剝製鳥）

木の實はみ木の根とりくひいきながら空に昇りて神とならむかも（六月例會席上二首）

こち村とさき村のあはひしみ立てる森に祭れるうぶすなの神

日の本のますらたけをのをたけびに仇の砦は逃げて人もなし（七月例會席上三首）

躬恒等の歌をよろこぶ歌人は蛙となりて土にはらばへ

うじたかれしこめき國にわく蠅の群をみだして風に飛び散る

みほとけにささげまつりし蓮の葉も瓜も茄子も川に流しぬ（七日第二會席上）——明治三十三年——

兼題の歌

をかしといふ猿の芝居を見に行けば顔に手をあて猿が泣きけり（芝居二首）

むしろ掛けし芝居の小屋は雨漏りて雨のふる日は芝居やすみぬ

川口のゆるき流れにかけわたす橋長うして海見えわたる（橋二首）

山川の早き流れにそば立てる大岩かけて二橋わたす

ほととぎす竹やぶ多き里過ぎて麥のはたけの月に鳴くなり（時鳥）

窓の外にうかがふ鬼のかくるるとかしら隱して角（つの）を隱さず（鬼二首）

なにをかもいたく恐れか赤鬼のおもてか青にうちふるひ居り

國原はやみの夜空におほはれて星あきらかに天の川流る（星三首）

山かげの桃のはやしに星落ちてくはし少女は生れけむかも

ぬば玉の闇の夜空に尾をひきて遠つ海原ほしとびわたる ——明治三十三年——

卽景

畑の中を庵へかよふ道のへの桑のめぐりに芋を植ゑたり

畑の上を風の渡れば芋の葉のゆらゆらゆれて
いそがしきかも

樫の木の並立つひまに畑見えて畑のつづきに
小松原見ゆ

垣の外になめて植ゑたる柿の木のうまし木の
實のともしきろかも

もろこしの高穂ゆるがし畑をすぎ庭の木草に
風ふきわたる　――明治三十三年――

朝顔

或日人の家にて朝顔を見てよめる

松をうゑ茄子(なすび)をつくるかたはらに朝顔はひて
垣にからめり

あさがほと葡萄の棚とあひならび葡萄の蔓に
朝顔からむ

もとあらの棚に這はせしあさ顔のいや長蔓の
しげりはびこる

この庭の朝顔きりてつなげらばさき村ゆきて
木にからむべし
棚にしてからむ朝顔その蔓のたれしところに
苔(つほみ)ふくれつ　——明治三十三年——

萩

萩のはなぬける白玉ともしけど露にしあれば
とりがてにすも
ひまあらの垣にしげれる白萩のしらしら見え
て夕月のぼる

萩の上にすずめ止(とま)りて枝ゆれて花はらはらと
石にこぼるる　——明治三十三年——

松島

松島に遊び大高森にのぼりて

美しき夕なぎ見ればば五百年も此海ばかり搖ら
なくおもほゆ　——明治三十九年——

姫桃

まくらがの古河(こが)の姫桃ふふめるをいまだ見ね
どもわれ戀ひにけり　——明治四十一年?——

竈山

宵に焚きてあけのまだきの灰寒きまかまど山は石白く見ゆ　——大正三年——

霰

はやり夫を太刀の痣丸鞘を離れ霰は庭の石打ちて寒し　——大正三年——

長歌

明治三十四年

橋

大王のとほのみ門と、しきます越の國内に、山はしもさはにあれども、名ぐはしその立山を、いめぐらふかたかひ河は、征箭なす水のはやけば、架けわたす橋もあらねば、鄕人のいよりつどひて、かにかくに計らひけるに、その中の人の言へらく、山祇の神の命に、こひのみねぎ申して、うつそみの人の命を、そこにしも沈めてあらば、とこしへに橋はあら

むと、苟且に言ひけることを、その人の命沈めと、神よさしよさせりければ、悔ゆれども せんすべ知らに、ひとり子とめでし少女を、手ひかひてなげき告ぐらく、命をし永く欲りせば、徒らにものな言ひそと、秩の實の父の命の、いましめと告げけることを、山吹のにほへる妹が、吾背子と相見しのちも、繭ごもり息づきわたり、背をだにも呼ぶことなければ、妹名根をかひなきものと、ふるさとに背子がおくりて、立山の山の麓の、橋のへに到りし時に、獵人の筒とり持ちて、分け入りし山の

雉子の、柴中に鳴きける聞きて、年久に言はざる妹が、言はまくの默もありせば、水底に父ありけめや、孀戀に汝が鳴かずば、さつ人に知られけめやと、打なげき叫び言ひける、科坂在古思の少女の、古にありけることを、いひつがひかたりつがひて、うつそみの今のをつつに、聞けば悲しもちちのみの父を悲しみもだもありし越の少女のいにしへ思ほゆ

灯

ころも手の常陸の海、夏麻引海上潟と、こちごちの波の來よらふ、犬吠の埼の上に、天しぬぎ立てる臺に、常夜にてれるともし灯、曇る夜の風の吹く夜は、往きなれて通ひし船も、これなしにえ行かぬ念へば、あやにたふとき

浮巣

五月雨のいやしきふれば、うらさびてさぶしき沼の、水配りの水の門のへより、榜ぎさかり蘆原ゆけば、邊にしづき沖になづさふ、に

ほどりの水草咋ひ持ち、搔きあつめむすぶうき栖の、風吹けば風にゆられ、波立てば波にゆられて、しまらくも安からなくに、そこにして卵子は生りぬ、あはれその栖を水に住むものにあるから鳰どりの水草が中にその栖つくらく

わすれ草といふ草の根を正岡先生のもとへ贈るとてよみける歌並短歌

久方の雨のさみだれ、おぼほしくいや日に降れば、常臥にやまひこやせる、君が身にいたもさやれか、つねには似てもあらずと、玉鉾

の知らせのきたれ、　葦垣のみだれて思へど、
なぐるさの遠くしあれば、　せむ術もそこに有
らねど、　はしきやし君が心の、　慰もることも
あらむと、　吾がおくるこれの球根は、　春邊は
しげき諸葉の、　跡もなく枯れてはあれども、
鑛は鎔くる夏にし、　くれなゐの花の蕾の、　一
日に一尺に生ひ、　二日に二尺に延び、　時じく
に匂ひぞ出づる、　忘れ居しごと

短歌

病をし忘れて君が思はむとこの忘草にほふべ
らなり

大洗の岬なる水戸侯の別莊を見てよめる歌

ころも手の常陸の國は、　大海に直に向へば、
見がほしきいづこはあれど、　大汝少彦名の、
いしづまる神の三埼は、　磯みれど沖べを見れ
ど、　ならびなきはしき岬と、　玉蔓たゆることな
く、　あともひて人もつぎ來れ、　ここにしも
いほりし居らば、　命も長くあらむと、　大王の
暇たまへば、　族をここに聚ひて、　立居て見れ
どよろしみ、　ころ臥して見れど宜しみ、　日も

足らずそこに念はし、年のごとありける公が、
行水の行きて去にきと、狂言か人の云へるに、
をと年も去年もことしも、潮ざゐの有磯の上
に、い立たせることもあらねば、玉松のしげ
きが下に、素のごと家はあれども、さぶしき
ろかも
畏きや神の三埼にうつせ貝むなしき家を見れ
ばさぶしも

蚯蚓鳴く

あらがねの土の下にて、己が世の住みかもと

むと、たまさかに凝りてむすべば、さ百合は
なそこに開くと、古ゆ今に言ひつぎ、世の中
に怪しきものと、尻のへもかしらも分かず、
はひもとほり生ける蚯蚓の、竹籠を手にくる
絲の、ほそぼそに鳴くなる宵の、績苧なす長
き夜すらは、いねがてに常する吾も、やすい
するかも

鑛毒地被害民の慘狀を詠ずる歌一首並反歌

下つ毛の足尾の山は、まがつみのうしはく山

か、その山に金掘るなべに、かなけ水谷に漲り、をちこちの落合ふ川の、大舟の渡瀬川に時分かず流れ注げば、その川の霑す極み、あら金の土浸みとほり、八つ子持つ芋も子持たず、蠶飼ふ桑も芽ぐまず、水田には蘆生ひしげり、くが田には萱し靡けば、安らけく住みにし民も、過ぎへなむたどきを知らに、父母は阿子に離れて、壯丁はも妹に別れて、うき雲のさ迷ひ行けば、たまり水止まるものも、ありへにし家にも居かねて、煙だに下に咽べば、世の中にまさしき人の、同胞の嘆くを見

れば、いかで吾仇にはあらめやと、益良雄の鋭心起し、家わすれ身もたな知らず、國統ぶる司の門に、つばらかに聞えあぐれど、大君の任のままに、きくといふ司人やも、正耳はしひにけらしも、ももも足らず八十たび申せど、かへり見ることもあらねば、飯に飢て恨み泣けども、すべもあらぬかも

反歌

いかならむ年の日にかも毛の國の民の嘆きの止む時あらむ

庭にある楓の木のいろ付きたるを見て よめる

水不足あか田くぼ田に、もとほらひすじつま
呼ぶ、蛙手の木々の木ぬれは、秋さればもみ
づとを言へ、みな月のけふのてる日に、ここ
に匂へる

霊薬之歌竝短歌

八十綱をもそろに懸けし、神代にかい引き寄
せけむ、伊豆の海の沖邊はろかに、七つまで
なみ居る島の、中つ邊に宜しみ立てる、にひ

島に住みてある人の、痛付ける妹をあともひ、
船泊つる下田の浦に、しくしくに打ち寄る浪
の、おとに聞く藥師たづねて、京都邊に上り
にしかど、すべなみと告らえにければ、いく
ばくも生けらぬ命、同じくは家に死なむと、
うつせ貝空しき行きを、しづく玉おもひ沈み
て、なげきのみありし間に、いさり火の仄に
だにも、人言に聞きにけるかも、まがなしき
妹がためには、しましくもためらひ居れやと、
釣船に白帆はあげて、ただ渉り波路ちわきて、
うむ麻の總の國邊の、樹隱りの我家に來り、

藥えて歸りにしかば、しなへのみありける妹が、七日まで日はも經なくに、斧とりて分け入る山の、杉の木の皮剝ぐ如く、枕つく小衾去りて、忽ちに病は癒えぬ、かくのごとはやきしるしの、世の中にまたもあらめや、天の隈とほつ祖より、うつそみの人の命を、救へりしかずは知らえず、しか故に年のは毎に、かぶら菜はここだも作る、世の人おもひて

短歌

人のすることにはあれどもこきだくに蕪作るも世の人のため

余が家祕法を以て藥を製す、蕪菁を作りて之が料に充つ故に末節之に及ぶなり

ひしこ漬

足引の山を近みと、木隱りに家居しせれば、世のことしけ疎くあれど、雁がねの刈田さわたり、秋風の寒けき頃の、照る月の明き夜頃は、鰯引く浦にぎはふと、辟竹の籃にみてなめ、ここまでにひしこも來れ、鶉啼く畑のしげふの、しだり穗の粟とり交へ、八鹽折の酢

につけまくと、京さびここに吾せる、珍らし
みとぞ
秋風の寒く吹くなべ竹籃にひしこ持ちて來と
ほき濱びゆ

髪

十月の末母の命によりて成田山にまうで毛綱を見て作れる歌並短歌

母刀自の依しのまにま、鳥じもの朝立ち出で
て、下埴生の成田の寺に、夕さりにい行き到
れば、人あまたそこには滿ちて、靈しくも八

棟立ちなみ、珍らしき物さはなれど、玉の輪
と捲ける太綱は、いた惱む吾背がためと、眞
悲しきめづ兒がためと、をみな兒の思ひしな
えて、丈長のその黑髮を、利鎌もて萱刈るご
とく、ふさたちて供へまつれば、千五百房八
千五百房と、山のごとつもれる髮を、堅より
によりて結びて、この岡の岡の上ろに、棟引
くと掛けし毛綱ぞ、下埴生にいます佛は、上
つ代ゆ今のをつつに、たふとみと人の來寄れ
ば、この綱のいやながに、太綱のたゆる
ことなく、後の世もしかぞあるべき、みほと

けの寺

短歌

をみな子のその丈長の黒髪を斷ちて結びし太綱ぞこれ

冬の夜

いちしばの林がうれに、風のいたくし吹けば、まげいほの廬のめぐりは、黍の稈しじにゆへども、すべもなく寒くしあるを、ぬばたまの夜さりくれば、焚木だに折りては焚かず、と もし灯を中に圍みて、新藁を繩に綯ひつぎ、

白絲を鯛に手くると、暇もなくいそしむ人の、ふけ行けば簀子が上に、うす衾引きかかぶりて、さぬらくの安しとかもよ、憂けくは知らに

登筑波山詠歌竝短歌

天地の開けし時に、瓊矛もて國探らせる、二柱神の命の、い立たし筑波の山は、しみさぶるまぐはし山と、常に見る山にはあれど、秋の日のよけくを聞けば、巖が根の路をなづみて、落葉吹く峯の上に立てば、そがひには

山もめぐれど、眞日向ふ南の方は、品川の入
江の沖も、陽炎のほのに見えつつ、をしね刈
る裾曲の田居ゆ、いや遠に開けけるかも、男
の神のときて干させる、白紐と河は流れぬ、
女の神のいとりなでさす、み鏡と湖は湛へぬ、
うべしこそ筑波の山は、時なくと人は來れど
も、秋の日のけふの吉日に、豈如かめやも

短歌

秋の日し見まくよけむと筑波嶺の岩本小菅引
き攀ぢて來ぬ

冬十二月水戸に赴く、途に佛頂山を望みて作歌竝反歌

石工槌とりもちて、刻みける佛の山は、楯な
はる山の穗の上に、いなだきの秀でたる山ぞ、
その山の山もとにして、諸木々の木末しぬぎ
て、そそり立つうちの矛杉、大枝の五百枝ひ
ろごり、あたりには茅も生ひせず、しげりけ
る樹にはありしを、まがつみのおすひしもの
か、なる神の轟くはしに、久方の天の火下り、
ただ裂きに太幹裂きて、その幹のうつろも燒
けば、いつしかも枯れてはありけれ、天が下

にいくらもあらじを、杣人の斧うちふりて、
太綱かけ伐りきといへば、見まく欲り思ひて
行くとも、再びもそこに見らめや、そこもへ
ば佛の山を、枯山にいま我見つる、ここだ淋
しも

反歌

とこしへに山は立てども生けるもの杉にしあ
れば枯れにけるかも

明治三十五年

鬼怒川の歌（課題春の川）

こもり江の蒲のさ穂なす、散り亂りひた降り
しける、雪自物天の眞綿を、荒山の狹沼うし
はく、御衣織女鬼怒沼比賣が、五百籌をかけ
の手繰りに、巖が根にい引きまつはし、玉の
緒にいより垂らして、とどろ踏む機足とどろ
に、織り出づる二十尋布を、春の野の大野の
極み、きぬ河の礫が上に、岸廣にはえたる見
れば、あやに奇しも

二月二十五日筑波山に登りて夫婦餅を詠ずる歌竝反歌

狹衣の小筑波嶺ろは、八十尾ろに根張り足引き、峻しけくこごしき山の、山うらの山毛欅の木根踏み、巖陰の雪消になづみ、贄は欲りし足なよなよに、登り立つ日子遲の峰と、さし向ふひがしの峰の、中つへを設けの宜しみ、茅がや葺く四柱いほに、煤火たき榾たきあぶる、串餅をうましもちひと、ここだはたりぬ

反歌

筑波嶺に後來む人も吾が如くここだ欲るべき串もちひこれ

三月のはじめ下總神崎の雙生の岡より筑波山を望みて詠ずる歌竝反歌

十握稻ふさ刈る鎌の、燒鎌の利根の大川、川岐に八十洲を包む、五百枝槻千葉の大野の、ならび居の雙生が岡に、ただ向ふ筑波の山は、登り立ち見れどよろしみ、下り居立ち見れど宜しみ、よろしみとよろぼひ立てる、くはし山見が欲し山の、筑波嶺吾は

反歌

千葉の野ゆ筑波を見れば肩長の足長山と霞たなびく

おちつばき

○

刈枝の枝の燒生の、蘆かびにせくや水泡の、足白の手白の子ら、繭むすぶ絲の永日を、いそばひに蓬は摘むと、よもぎ苗あかず摘ますと、小鍬とり打つやあら埴の、さくろにな日には照らえそ、蓬摘む子ら

○

しらしらし白けたる夜の、李ちる朧月夜を、穴こもるたはれ狐か、荊づらすくすくと出て、うまいする兄彦が家の、廚なる鍋とり持ち來、柿の木の枝にそを掛け、そねの木の枝にそを掛け、よひよひにたはれすらくを、小竹撓めて罠かけ待てど、さやらねば兄彦思ほえ、その狐手捕にせむと、荊分け鋤とりい行き、腰惱むおどろが下に、くたれ木の木の根掘り來つ、狐え捕らず

○

小懇田をかへでの枝の、赤芽吹く春日のどけ
み、いめのわたうつらうつらに、肱付きにま
ろ寢をすれば、爪引くや弓絃のひびき、ひび
くなす諸羽振らばひ、虻の飛ぶかも

三月二十四日風雪を冒して遠く多珂郡に行く乃ちよめる歌竝短歌

物部の眞弓の山の、尾の上には人さはに据ゑ、
谷邊には人さはに据ゑ、巖根裂く音のみ聞き

し、諏訪村の梅咲きけりと、とほ人の吾に告
らせば、燃ゆる火の焰なす心、包めども包み
もかねて、をとつ日の雨降る日の、きその日
の雪降る日の、今日までにけならべ降れど、
時經なば散りか過ぎむと、行き惱み吾はぞ追
へる、とほき多賀路を

短歌

雪降りて寒くはあれど梅の花散らまく惜しみ
出でて來にけり
多賀路はもいや遠にあれば行かまくのただに
は行かず時經ぬるかも

白帆

かぎろひの夕さりくれば、鹽つまる和田の宮居の、玉かざす少女が伴は、足引の大山つみの、山彦に合ひし合はまく、青蔦の麥野をよぎて、榛の木の小枝が垂穗を、あさみどり柳が絲を、春風のさゆらさゆらに、裾引にいゆりわたれば、こちごちの谷付く水の、川しりの八十つ船女が、うはなりのねたみ思ひて、をとめらにい及きあはむと、曳綱の曳かくを遲み、さす棹のささくを遲み、尾羽張に白帆は揚げて、日もおちず夕さりごとに、こりせずとひた追ひすもよ、い及きあはなくに

いまいましさのたへがたきことありて

丈夫の腋挾み持つ、桑の弓梓の弓、弓こそはさはにあれども、吾持つや手握細、細小竹のへろへろ矢、天とぶ雁にさやらず、槻が枝の鷦鷯とらむと、鷦鷯はや木ぬれはうつす、いたづらに吾とる弓の、へろへろ矢あはれ

睡猫を見てよめる歌（課題檐）

すしたるやわぎへの檐の、丸垂木日さしが上

に、さ蕨の背くくまりつつ、いをしなすはし
き二つ毛、春の夜の心うかれに、夜もすがら
背を覓ぎかねて、思ひねにさぬとふものか、
あはれあはれ汝が人にあらば、味酒の丹頰に
笑まひ、藍染の衣きよそひ、ほとほとに戸は
叩かむを、夜もすがら背を覓ぎかねて、ここ
にしもさぬとふものか、二毛猫汝はも

詠蛤歌

うまし子をうみ那須山の、蘿蒸すやゆづ岩村
に、あり立たす石人男、波の穂ににひづま覓

ぐと、告るなべに潮沫別きて、うむぎ比賣き
さかひ比賣と、ならび立ちみ合ひし時の、弟
媛の心ねぢけに、堅縄の目細網に、兄媛をし
二十巻き沈け、埴染の衣にほはし、獨のみ山
踏む時に、その山の底ひ搖らびて、天遙に火
立ち騰らひ、巖根木根ひた燒きしかば、うま
し彦石人男、弟媛と共にみ失せぬ、うむぎ比
賣和田つ水底に、背を念ふ心は止まず、凝り
鹽の辛くのがれて、沾衣あぶりもあへず、燒
山にた走り到り、ひた土にこひ伏しまろび、
訴へ泣き叫び悲しみ、弟媛が焦がへし灰に、

裳の裾の垂鹽注ぎ、掻き抱き塗らひにければ、
えをとことよみ歸らせる、吾背子と手たづさ
はりて、そこをしも住み憂の山と、八つ峰越
えそがひの山の、鹽谷にしすみかま探り、蛤
はも堅石なして、堅石はうむぎの如も、化り
化りていや長に、こもりいますはや（鹽原の山中
蛤の化石を産す故に結末之に及ぶ）

渡舟

下ふさ利根川のほとりなる今村の引渡
しといふをわたりてよめる

さき岸にい杭を立て、こち岸にい杭を打ち、
い杭に縄とりかけ、つなげる舟の、おもしろ
のあな舟はや、縄引けばここにより來、縄引
けばそこによらくと、吾引きわたる伊麻村の
穿江、

茂り

木兎もて鳥とることをよめる歌

垂乳根の母が桑つみ、蠶飼ひすとつくれるか
ごの、さき竹のしじにさし交ふ、五百枝槻も
とべをぐらく、繁らへる森のはたてに、鳥網

はり木兎据ゑ待てば、木ぬれ行く烏のむれ、
さへづるや鷦鷯のむれと、目叩く木兎あなづ
らひ、おのが尾をさやるを知らに、おのが羽
をさやるを知らに、枝うつりいより亂らひ、
とよもせるかも

自像に題す

梁戸といふところの土をとりて自ら吾型をつくる

いくみ竹梁戸の坂の、埴とりてつくれる型、
目しりはゑにしだの木の、垂れたるや吾目ら

かも、口もとは騰波の湖の、眞菰なすまばら
の髭、その髭はやなき

鳥居

涙逆の浦より息栖を過ぎてよめる歌並短歌

ひたちなる浪逆の浦は、荒海なす浪のさわげ
ば、薦槌の往き交ふ舟の、舟人のまもりのた
めと、うなじりの小門にまつれる、八咫鳥息
栖の宮は、みなぞこゆ八尋の柱、太知れる鳥
居が下を、忍穗井の水と喚ばひて、さす潮の

さして引けども、ひく潮の引きてさせども、
わく水の淡くたたへて、石上(いそのかみ)ふるのむかしゆ、
ありさりし甕のへみれば、女の瓶は深くこも
らひ、男の瓶はおほにしあれば、つばらかに
見むと思ひて、搔き鳴すやこをろこをろに、
竿とりに探り見るべく、かしこきろかも

短歌

小鹽井の鹽井の水にあり立てる息栖のとり居
みるがたふとさ

茄子

かねてより土かへおきたる十坪ばかり
のところへ瓜茄子などを作りて

瓜つくり茄子つくりすと、瓜の葉は蟲はむ故、
竈なる灰とりかけ、茄子の葉は日にしぼむ故、
楢が枝を折りて翳せば、くく立ちに茄子はさ
かえ、下ばひに瓜はひろごる、ひろごるや蕖
床の上に、枕なす瓜もよけども、いとはやも
なれる茄子の、尻太に照れるを見るが、めづ
らしきかも

人の子をあげたるをよろこびてよめる歌

鍬持つ手土につくまで、粂(くさぎ)るや畠の殖蒜、殖蒜のうらべにむすぶ、その玉の似てをあれし子、平らけく安くありこせ、父母のため

あまだれ物語抄

いまは昔からたちのかなひことなむ呼べるしれ人ありけり、くさぐさのことにかかづらひければ知り人あまた出できにけり、いつのころにかありけむ、法師ひとりゐてきにけるが、またなきひじりにて在しければ、よろづのこ

とわきまへあきらめずといふことなし、さみだれの雨ふりつづきて、いとつれづれしきに、この法師かひなうちさすり脛かきなでなど、ことごとしうしてありけるが、いかで人みなのために吾ひめ力こころみてむなど、きこえくるほどに、鎌とり鍬うちふりて、いばらづらさくさくにきりひらき、林つくりなむとさまざまの木などおほしける、ありがたきひじりの行ひかなといやまひかしこみけるに、なべての木ことごとく木末を下にしてぞさしたまひける、心えがたく思ふものから、人々ただもだしてのみぞありける、ここにおなじ縣の片ほとりに住みけるなにがしの小さ人といふものありけり、心おろかなりければ、法師のこと

どもさらさらに知らずてのみありき、かやまのまなかひまろといふ人いやとほにへなりけるが、はろッばろにきこえければ、小さ人きおどろきて心あわただしうさぐり見て、小さ人がよめりける

あがたもよ吾住むあがた、いばらづらい刈りひらき、ほふしのなすや手わざを、上行くとあぜこえい行き、からからに蛙はなき、下行くと穴穿りいゆき、ころころに螻蛄ははやす、けらだにもしかこそはやせ、蛙だにかくこそなけ、吾はもや小さ人、吾耳はかけ樋の小筒、そこなしにたまらぬかも、人言はとまらぬかも、しかれこそ知らずありけめ、小林に入りて見まくと、入り見まくよりしよらめや、逆生のをはやし

茸狩をよめる歌並短歌

筑波嶺は面八つあれど、的面は杉深み谷、背面は笹深み谷、東は巖立つ峰と、峰の上は攀ぢても見ず、谷のへは探りても見ず、酒寄の青嶺が下を、和阪の吉阪と別れて、つどひくる少女をとこの、立ちならし小松が根ろに、茸狩るといそばひすもよ、秋の日をよみ

少女子の小松が根ろに茸狩ると巖坂根坂踏み
ならすらし

八月廿九日、筑波のふもとへ行く、

栗のいや珍らしきをよろこびてよめる

たたなづく青垣よろふ、筑波嶺の裾曲の田居
は、甘稻の十握に實る、八十村の中の吉村は、
なぐるさの遠くしあれば、足毛には玉ちるま
でに、汗あえて吾きて見れば、思はぬにみあ
へつしろと、めづらしき栗にもあるかも、小
林の木ぬれになるは、青刺のまだしきものと、

とりとみぬ秋のまだきに、ここにたふべぬ
あしびきの山裾村に秋きぬと栗子姉子はかね
付けにけり

八月三十日、夕、きぬ川のほとりを歸る
に幼子どものむれ遊べるを見てよめる

青鉾の葱を折り、袋なす水を滿て、うらべに
は穴をあけ、その穴ゆさばしる水を、おもし
ろといそばひすもよ、白栲のきぬの川べに、
夕さりにつどへる子らが、いそばひすもよ

壬寅の秋、歌の上に聊か所見を異にし、左千夫とあげつらひせるころ左千夫におくれる歌

みづみづし粟の垂穂の、しだり穂を切るや小畠の、生ひ杉菜根の深けく、おもほゆる心もあらねど、吾はもや相爭ひき、しかれども棕櫚の毛をよる、繩のはしさかり居りとも、またあはざめや

山菅のそがひに向かば劒太刀身はへだてねど言は遠けむ

上總行二首

九月五日、埴谷の杉山見に行きて

赤阪は鎌わたらず、小芒のおどろもゆらに、蛇ぞさわたる、蛇わたる山の赤阪、行きがてぬかも

六日、八街原を歸りくるに波の音きこえければ

から籾をすり臼にひき、とどろにきこゆるものは、とほどほし矢刺の浦の、波にしあらし

明治卅六年

狂體十首

萬葉集の尨大なる作者もさまざまに、形體もさまざまなるものから、仔細に視むことは容易のことに非ざれども、一言にして之を掩へば、句法の綿密にして音調の莊重なるはその特色なり、少くとも佳作と稱すべきものは大抵これなり、

記、紀の歌は萬葉の素をなしたるものなれば相似たるは固よりなれども、その間自ら異りたるものありて存す、句法の如き萬葉の緊りたるに比すれば寛かに、音調の如き萬葉の重

きに比すれば朗かなりといふの當れるを思ふ、而して共に措辭の巧妙にして曲折あるは規を一にす、之を譬ふるに萬葉の歌は壯夫の弓箭を手挾みて立てるが如く、記紀の歌は將帥の從容として坐せるが如けむ、神樂、催馬樂はこの二つのものに比するに、分量に於て、價値に於て、同日の談に非ざれども、遙に悠長にして、遙に卑近なる所、記、紀、萬葉の以外に長所の存するところにして亦一體なり、要するに萬葉の歌を眞面目なりとすれば、記、紀の歌は溫顏なるが如く、神樂、催馬樂は卽ちわどけたるが如し、

神樂、催馬樂には折り返し疊み返したる句多し、これ曲に合せて謳ふものなりといへばな

らむ、調子のゆるやかなる所以なり、その謳ふや必ず雅撲にして超世の思ひあるべしと信ずれども、寡聞にして未だこれを知らず、單に普通の歌として見るに過ぎざれども、亦研究に値すべきものなからず、五言七言の句以外に三言四言六言八言九言も自由なるべく、漢語俗語を用ゐるもよく調和すべきが如き、まま奇警なる語句を挾むところあるが如き、他の體に見るべからざるものなり、只そのこれをいふものなきは、注目するものの少きに因るならむ、

狂體十首は普通の歌として視たる神樂、催馬樂の體を參酌して試みに作りたるものなり、研究の足らざるや、その體の完全なるものと雖

も成ること難からむ、ましてこの體の果して發達生長せしむべきものなりや否や疑はしきものなれば失敗に歸したるは勿論のみ、されど予はその成るべきか、成らざるべきか自ら悟らざるまでは折々に作りて見むと思ふ、晦澁卑俗なるの故を以て斥けられざれば幸なり、

その一

穭田(ひつぢだ)におり居の鳴、しぎつき人(と)つき網もち、
とほめぐりいや近めぐり、めぐれども羽叩もせず、鳴はをらずや、鳴は居れどかくれて居りと、おのれ見ゆらくを知らに、稻莖に嘴を

さしいれ、さし入れてかくれて居りと、網で
とられきや

その二

おほ寺の榎がうれに、このみをばとりてはま
むと、網かけてのぼりけむや、梯かけてのぼ
りけむや、はしもかけずつなもかけずて、な
にをしてかよぢけむぞ子や、おりこやと母が
喚べど、このみはみおりてもこぬや、父がよ
ばばおりや

その三

水づくや稲の朽田に、ひれふりてあそべる鮒
を、筌(うへ)おきてとらばよけむや、叉手(さで)さしてす
くひてとらむ、しかれども叉手をさせば、田
をこえてにげて行くや、畔(あは)放(な)ちてたれかおき
けむ、吾田の畔を

その四

殖椚くにぎがしたに、芒刈るをとめ、ながが刈
らせこそ、春野の雉子、あすからはかくれて
逢はむや、あはむやきぎす

その五

葱つくりは灰こそよき、藁灰や粟がらの灰、
黍稈の灰もこそよき、しかれども竹の灰は、
まことぞも葱は枯らす、竹やくなゆめ

その六

芋の子の子芋こそ、九つも十もよけれ、とし
ごとに子もたるをみな、子はもたせこそ盥の
そこを、一つうち二つうち、三つ四つや五つ
六つうち、七つうたばとしの七とせ、へだて

てぞ子はもつらむや、八つうたば八とせや

その七

葦邊には羽をあらうて、羽あらうてわたる棹
雁、棹もちてここにおちこ、吾田のや刈束稻、
馬に積み車に積み、そのあまりは扨にかけて、
もて行かむに扨もがも、その棹もちこ

その八

法林寺の佛の首は、雨もりておつればつぐ、
鷺のくび木兎のくびも、かたみ換へ接がばつ

ぎうるや、そのつぐは生麩わらび粉、そくい
ひつのまたいせのりもあれどえつがずや、に
べにかはこそ付けばとれぬもの、その膠はこ
とひの牛の、さ涎(よだれ)のこりてなるちふ、まこと
しかなりや

その九

篠原やしぬをため、おしためて罠をつくり、
しりからは籾はくはえず、さきから籾をくは
むと蒿雀(あをじ)ひよどりや、ひたきも取れてあらむ
と、こはや足をはさまれて、はさまれて居る

鼠や、をばやし小溝の鼠、みづ田くが田の鼠
は、みしねくひ麥くふ、きやう鼠はつか鼠、
いへなる鼠は戸も柱もくひやぶれど、ひるは
梁にかくる、大宮の老鼠、わなにもかからず
て、よるはかくれてひるいづる、老鼠や

その十

いなだきをなからに剃り、そりいなみいたも
泣く子や、洟(はな)ひるや木でのごはむや、竹で拭
はむや、さらさらに利鎌に刈りて、萱でのご
はむ

『馬醉木』に題する歌竝短歌

うちなびく春の野もせに、とりよろふしどみの木と、馬醉木(あしび)とをありとあらずと、非ずとは人はいへども、ありと思ふしどみが花は、いつしばの落葉がしたに、ふし芝のかれふがなかに、馬の蹄ふりはふりとも、利鎌もて刈りは刈りとも、しかすがにしじにほひて、うらもなく吾めづる木の、まぐはしみ吾みる木ぞ、しどみの木あはれ

春の野にさかりにほふしどみの木あしびと否と我はおやじと

春の野にい行かむ人しいつくしきしどみの花は翳してを見らめ

雉子なく春野のしどみ刺しどみおほにな觸りそその刺しどみ

わが知れる三浦氏は眞宗の僧なるが、五月の初に男子をうみければ喜びにより みて送りし歌

栗山や佛の寺の、小垣外に麥をまき、土かふ

や麥の穗の、いちじろくほにいでまくの、は
しきかもその子

蕨眞が女の子を生みけるとおぼしくて
左千夫が歌をよみけるを見てよみける
歌一首

いもの子が蠶室(こむろ)をたて、壁に塗る埴谷の山の、
松がさ小がさ、はしきやし小松がうれに、な
りなりてつらになるちふ、まつ笠小笠、

まつかさ集　四首

七月廿六日、左千夫君百穗君と共に雨を冒して筑波山に向ふ、越えて廿八日予之を予が家に招く、途に騰波の湖を渉り大木より下妻といふ所を過ぐるに鉢植のうつくしきをおきたる家あり、さし覗きて見れば針の師匠の住む家にて少女どもあまたならび居たれば戯れに作りたる歌

槻の木の大木の岡の、ひた岡に小豆をまき、
小豆なす赤ら小女を、立ち返りよくも見なく
に、けだしくも心あるごと、人見けらずや

予が家に盗人の入りたる穴をもとの如くふたがずありしを左千夫君の見とがめければよみける歌一首

はしきやし騰波の淡海の、水くまりの穿江があすれば、葦邊にや穴をつくり、蟹こそそこにはひそめ、ひそめども手をさし入れて、搔き探りとるとふものを、盗人のきたち窺ひ、かくのごと壁はゐりしか、すむやけく去にけるもの故、とりがてにあたらしきかも、穴はもあれども

二十九日、けふは歸らむといふ左千夫君をおくりて椚林の中をさかゐといふ所へ行く、ひた急ぐ程に左千夫君おくれがちに喘ぐさまなれば、戯れてよめる歌

赤駒の沓掛過ぎて、楢の木の生子を行けば、萱村に鳴くやよしきり、よしきりの止まず口叩き、足惱むとひこずる君を、見るがわぶしさ

左千夫君予より重きこと七八貫目、予が先立ちて行くごとにいつも我は七八

貫目の荷を負ひたるが如し、君にそれ程の荷を負はしめなばいくばくもえ行じと、左千夫君の旅行くとだにいへば日にいくたびとなくいひ戯るるをききてよめる歌

赤駒の荷をときさけて、七秤八秤もちて、おひ持ちて我をば行けと、ひた走せに走せても行かむを、から臼なすふとしき君が、ほほたぶら秤にかけ、しりたぶら秤にかけ、七はかり八はかりかけ、切りそけて我に負はしめ、負はしめもいざ

佛の山を過ぎてよめる歌竝短歌

佛の山は常毛二州に跨る、阪路險惡、近時僅に車馬を通ず、往昔の世山麓に浪士あり、四郎左衞門と稱す、人を殺し財を掠むること算なし、一女あり母を失ふ、四郎左愛撫措かず、女長じて容姿溫雅、擧止節有り、竊かに父の爲す所を憂ひ、しばしば泣いて諫むれども聽かず、一日秋雨蕭々黃昏に至りてやまず、女乃ち決然として起ちて裝を旅客に變じて過ぐ、四郎左悟らず、遙かに射て之を斃す、其走つて囊中を檢せんとするに及び哀痛悲慟禁ずること能はず、剃髮して佛門に歸し、あまねく海内の名刹を周遊し、還りて石佛を路傍に建つ、

大さ丈許、今に存せり、後四郎左天命を全うして佛の山に歿す、而して涙痕つひに乾くに至らざりきと云ふ、

よねをしね石田刈り干す、片庭の山裾村ゆ、
下つ毛にこゆるみ阪の、たむけぢの佛の山に、
いにしへにありけることと、耳たえず我聞く
ことの、麓へに住みける人の、弓箭もち日に
けに行けど、ほろろ啼く雉子も射ず、萱わく
る猪も射ずして、人くやと潛めるみちに、秩
のみの父が待つ子も、柞葉の母が待つ子も、
たひらけく命全けく、こえ果つることもあら

ぬを、藁蓆しけこき小屋に、檀の實の獨りも
り居る、をとめ子の藍染衣の、染絲のさめは
つるまでに、うち嘆き訴へいへども、かへり
みる心もあらねば、眞悲しみ思ひ定めて、世
の人のなげかふことを、我だにも死にてあり
せば、留むべきこともあらむと、父が行く佛
の山を、草枕旅行くごとく、たどり行き臥(こ)や
せる時に、盜人に在りける父や、黄金にも玉
にもまして、惜みける己が眞奈子を、かから
むと思ひもかけねば、叫びをらび心も空に、
負征矢の碎くるまでに、櫨弓(はじゆみ)の弦たつまでに、

搔きなげく思ひつのりに、後つひに心おこして、建てにける佛の石の、朽ち果てぬためしの如く、うつそみのいまの世にして、この山を過ぎ行く人の、うれたみと聞きつぎゆけば、天地のながく久しく、かたり竭きめやも

短歌

劒太刀しが心より痛矢串おのが眞名子の胸に立てつる

郷に歸る歌

草枕旅のけにして、こがらしのはやも吹けれ

ば、おももちを返り見はすと、たましきの京を出でて、天さかる夷の長路を、ひた行けど夕かたまけて、うす衾寒くながるる、鬼怒川に我行き立てば、なみ立てる桑のしげふは、岸のへになべても散りぬ、鮭捕りの舟のともしは、みなかみに乏しく照りぬ、たち喚ばひあきたもしつつ、しばらくにわたりは超えて、麥おほす野の邊をくれば、皂莢のさやかにれる、よひ月の明りのまにま、家つくとうれしきかもよ、森の見ゆらく

反歌

太刀の尻さやに押してるよひ月の明りにくれば寒しこの夜は

明治三十七年

戯れに萬葉崇拜者に與ふる歌竝短歌

筑波嶺の裾曲の田居も、葭分になづみ漕ぎけむ、いにしへに在りけることと、あらずとは我は知らず、おそ人の物へい往くと、獨行かば迷ひすの、二人しては往きの礙(さは)らひ、妻の子が心盡して、籾の殼そこにしければ、踏みわたる溝のへにして、春風の吹きの拂ひに、籾の殼水に泛きしを、そこをだに超えてすすむと、我妹子が木綿花つみて、織りにける衣

も濡れて、泥にさへいたく塗れて、泣く泣く
に歸らひにける、おそ人とこを聞く人の、豈
嗤はざれや

短歌

萬葉は道の直道しかれども心して行けおほに
あらずして
萬葉は兒の手柏の二面に三面四面に八面に見
よ
藍染の衣きる人は藍の如ひいでむとこそ心は
あるらめ
筍のひでもひでずも萬葉の閾を超えて外に出

でざめや

明治三十七年一月三十一日長妹とし子
一女を擧ぐ、長歌一篇を賦しておくる、
篇中の地はとし子が居住に接せり、歌
に曰く

朝月の敏鎌つらなめ、馬草刈りきほふ處女の、
朱の緒の笠緒の原の、したもえの春さりあへ
ず、やすらけくあれし女の子は、垂乳根の母
の乳房を、時なくと含む脣、脣のつつめる奥
に、飯粒なす白齒かそけく、足手振り笑むら
むさまを、家こぞり待つらむものぞ、はや大

にあれ

反歌

小夜泣きに兒泣くすなはち垂乳根の母が乳房の凝るとかもいふ

くさぐさの歌

滿洲

落葉松（からまつ）と樅とをわかず、はひ毛蟲林もむなに、喫み竭し枯らさむときに、鵲はい群れて行きぬ、海渉りゆきぬ

馬賊（馬賊は魯の仇敵なり劉單子はその統帥にしていま長白山中に匿るといふ）

白檀の落葉散り、散り亂れど掃く人なみ、我たち掃く劉單子々々々、箒伐り木を伐り持ちこ、搔き掃きて川に流さむ、流さむを見に來

旅順

をぢなきや囊の鼠、ふくろこそ嚙みてもやれめ、そびらには矛迫め來、おもてには潮沫湧く、穴ごもり隱らむすべも、術なしにあはれ

栲衾新羅の埼の、あまり埼、いひき持ち來、
悉に引かざりしかば、常にたえずさへぐ韓國、
ことなぎむいま

樺太

阿部比羅夫楯つきなめ、艤ひゆきしからふと、
鰭つ物いむれてあれど、我獲ねば人とりき、
いまよりは海の眞幸も、我欲りのまま

變調三首

一

狹田の、稻の穗、北にむき、みなみに向く、
なにしかもむく、秋風のふきて

二

粘土を、臼に搗く、から臼に、とどとつく、
すり臼に、籾すると、すり臼を、造らむと、
土をつく、とどとつく

三

黍の穗は、足で揉んで、簾に干す、胡麻のか
らは、藁につかねて、竿に干す、さぼすや、
秋の日や、一しきり、二しきり、むくどりの、
騷だち飛んで、傾くや、短き日や

海底問答

二月八日の眞夜中より、九日にかけて旅順の沖に、砲火熾に交れば、千五百雷鳴り轟き、八千五百蛟哮え猛び、世界は眼前に崩壞すべく思ふばかり凄しかりき。碧を湛へし海水に、快げに、游泳せる鱗は、鰭の運動も忙しく、あてどもなく彷徨ひぬ。昆布鹿角菜のゆるやかに、搖れつつあるも、喫驚と、恐怖のさまを表明せり。かかりしかば海の底に、うち臥し居たる骸骨ども、齊しくかうべを擡げながら、うつろの耳を峙てしが、ばらばらに散亂せる白骨を綴り合せむと、遽しく手の骨を探すもの、脚の骨を探すもの、頭蓋骨を奪ひあふもの、混亂の狀を呈せし後、ゆるやかに動搖する水のまにま、ふらふらとして立ちあがり、物待ちげのさまなり。偵察に出でし骸骨は、昆布の根をば力草に、骨と骨との離るるまで、ゆき戻りきつ怪しきものの、落ち來りたるを報告せり。導かるる儘に骸骨は、ふらふらとして隨ひ行けば、そこにあたらしき死屍ありて、顏もわかぬまで焦げ煤けし、肉破れ骨の

あらはなる、腥きばかりならびたり。骸骨は、うち寄りて肩を抑へつつ、『白杏なる容貌に、棕櫚の毛を、植ゑしが如き鬚もてる、君はいづこより來りしぞ。この騷擾に關係あらむ、語れ』と促しかけたれど、應へもなきをもどかしげに、『さらば我まづ語らむ』と、言ひ放ちて、顎の骨の、歪みたるをおし直し、『我等はもと旅順にありて、只管天險の比なきを恃み、黄海の水あせぬとも、この戍陷るべからずと、心竊に驕りしに、料らず背面の攻撃にあひ、遁ぐべき路を失ひて、悉く海に溺れ果

てぬ。そをいまの事に思ひしに、はや十年の月日は經ぬ。まこと海底にすまひすれば、寒暑はさらに辨へざりき』かくいひてとりおとせる肋骨を拾ひ揚げながら、『波打際に浮き寄りしは、想ふに土中に葬られむ、我等はすなはち海の底に、白骨となりぬ。然れども、我が安心を人は知らず。骸骨は命死なず。骸骨は飢うることなく、睡眠を欲せず。病を知らず。未來永劫にかくの如く、敵の迫害にあふこともなし。樂しからずや骸骨は』いひさして骸骨はまた、『いづこより來しぞ、語れ、君、

昨夜よりの騒擾を、はやかたれ』と搖り動すに、死屍は口を開かむとすれば、海水忽ち入り塞きて、苦しげなるを、骸骨は、『陸上に在りしと海中とは、すべて自ら異れり、されば しづかに物いふべし。唯骸骨は自在なり。骸骨の構造は海にありて、すべての運動に適したり』死屍はすなはち徐ろに、『我は露西亞の水兵なり。昨夜旅順の港外にて、恢復の見込なきまでに、我が軍艦は撃ち破られ、我等も見るが如くなりぬ。談話の苦しきこと限りなし、その他はすべて想像せられよ』やうやく

これをいひ畢れば、『狀況はほぼ知悉せり。されど露西亞は强國なるに脆からずや』と訝り問へば、『我等が國を强國といへど、恫喝を以て誇るのみ、世界の人怯懦にして、我が暴戾を制せむとせず。義憤にあへばかくの如し』骸骨は首肯きて、『我等も嘗て世界を欺き、眠れる獅子といひ觸ししが、假面はつひに剝がれたり。弱きものと弱きもの、君等と我等と睦び居らむ。我もむかしは孔雀の尾を、飾りし軍帽嚴しく、尖のひらきたる劒を握り、進むには必ずしりへに立ち、退くにはさきに立

ちたりしが、かく骸骨となりたれば、孰れを孰れと分き難し。まこと貴賤も貧富もなき、自由平等の樂天地は、はじめて茲に發見すべし』死屍は聞きて嬉しげに、『好誼ある君達かな。さらば我も語るべし、稍物いふに馴れしごとし。我が艦隊の長官は、白銀の如く輝きたる、二尾の髯を胸に垂れ、風采すぐれし老將なれど、昨夜夫人の誕辰に會ひ、部下を率ゐて市街に上り、觀劇に耽りしその隙に、あはれ突擊を蒙りぬ。我等もさまで弱きにあらねど、敵の勁きこと比なきなり』骸骨は珍ら

しき物語を聞き、『君語れ、またさらに語れ、我等はもと酒煽り、婦女子を捉へ辱めしが、いま無欲なる骸骨となりては、徒にそを悔い居るなり』死屍は意を得しさまに、『我等が好みもかくのごとし。强姦奪掠憚らねば、市街の商人は武裝して、我が暴行を防がむとす、されど君責むる勿れ、我等が一ヶ月の給料は好める露酒の一瓶を、傾け盡すにも足らざるを』骸骨は話頭を轉じ、『たまたま潮の滿干により、陸地近く行きみれば、旅順の砲臺は露西亞の手に、經營されし如くなれど、防備は

寸隙もあらざるや』『我が恫喝の特性は、ここにもよく顯れたり。兵糧の運輸乏しきに、兵勇もさまでおほからず』 骸骨は小首を傾け、『憐むべし、陸上の兵はまた、我が運命の如くならむ』 骸骨のいひも竭きざるに、死屍は脣なほ青褪め、『さらばわれ守備の兵にはやく告げて去らしめむ』 と醎水なればかろがろと死屍は泛びあがりしが、少時にしてまたもどりぬ。 骸骨はみな齊しく、『水に沈みし者時をふれば、一たび必ず浮べども、死屍は再び人間に還ること叶はぬなり。人間の死を恐るるは、

骸骨の慰安を知らねばこそ。 我が腦髓は空虛なれば、思慮も考察も公平なり』 死屍は未だ骸骨の言を了解しえぬさまなれど、感謝の意を以て握手せしが、俄に眉をうち顰め、『いかに痛きものぞ。』 君が手は、』 骸骨は思はず失笑し、『柔かき手もて握れる故、我等が手は痛からむ。されば君記憶せよ。一日過ぎなば君が手は、ふとしくならむ、その時は、骸骨はなほ痛からむ。二日過ぎ三日過ぎなば、さらにふとしく、更にまた、痛かるべし。それよりは、體軀はますます靡爛して、癩病の如く見

ゆるならむ。魚族は爭ひてつつきはじめむ。かくて唯白骨とならば、君が衣服をつけしさまは、いかに不思議に見ゆべけむ。その時よりぞ骸骨の、眞味を解しはじむべき』うち語りて骸骨は『陸上の兵遠からずあと追ひこむ。それまではこころしづかに待ち居らむ。骸骨は世に拘らず』といひ畢りて素のごとく、死屍横はる傍に、ばらばらになり打ち臥しぬ。

明治三十八年

變體の歌

一

炭竈を、庭に築き、二つ築き、たえず燒く、
厩戸の枇杷がもと、掻き掃きて炭を出す、雨
降れど、雪降れど、菰きせて、濡らしもせず、
眞垣なる、棕櫚がもと、眞木を積む、粗朶を
積む、楢の木、櫟の木、そね、どろぶの木、
くさぐさの、雜木も積むと、いちじくの、冬

木の枝は、押し撓めて見えず

二

炭出すや、匍匐ひ入る、闇き炭がま、鼻のうれ、膝がしら、えたへず、熱き竈は、布子きて入る、布子きて入る、熱きかま、いや熱きは、汗も出でず、稍熱きかまぞ、汗は流る、眼にも口にも、拭へども、汗ながる汗ながる

三

萱刈りて、篠刈りて、編むで作る、炭俵、炭

をつめて、縄もて括る、眞木ゆひし、縄を解きて、一括り、二括り、三括りに括る、大き俵、小さ俵、左から見、右から見、置いて見つ、積むで見つ、よろしき炭、また燒いて、また燒き燒く

四

炭がまに、立つけぶり、陶物の、管をつなぎ、干菜つる、竹村に、をちかたに、導けば、をちかたに、烟立つ、夜見れば、ふとく立ち、日に見れば、うすく立ち、白烟、止まず立て

ば、竹の葉は枯れぬ

五

眞木伐りて、炭は燒く、炭燒くは、櫟こそよき、梔を、つつき破りて、染汁に、染めけむごと、伐り口の、色ばみ行く、眞木こそよき、櫟こそよき

六

疱瘡やみ、鼻がつまれば、枳殼、實を採り來、ひだりの、孔にさし、みぎりの、孔にさし、

忽ちに、息は通へど、炭竈の、烟噴き孔、土崩えて、塞がりてありしを、知らずと燒きし、かかり炭、いぶり炭、へつひには、火が足らず、火鉢には、烟立つ、いぶり炭、かかり炭

鬼怒沼の歌

上

脚にカルサン肩に斧
樵夫分け入る鬼怒沼山

藤の黄葉に瑠璃啼きて
露冷けき樹の間を出で
薄に交る楛の栗
上枝の毬に胸を擦る

黄苑はたかく咲きほこり
せむのうの花朱を流す
たをりの草に朗かに
白銅磨く湖の水
山の秀ゆるく四方に遠り
まどかに覆ふ秋の天

桔梗短くさき浸る
汀に寄らす天少女
玉松が枝に領巾解き掛け
湖水に絲をさらし練る

燃ゆるが如き絲引けば
紅うつくしく澄める水
白絲練れば忽ちに
たたへし水は白銀の如
青絲解きて打ち浸せば

琅玕にほふ底の石
七彩絲と管に卷く
小籠の絲を引き延べて
十二の箴に機足踏む
十二の聲の玉響き

諸手の眞梭の往きかひに
衣手輕くさゆらぐや
譬へば霧のさやさやと
山の梢を渡るごと

妙なる機の聲を慕ひ
擔ひし斧を杖づきて
我を忘れて聽く樵夫
風鐸遠く野にひびき
落葉が下に水咽ぶ

八十尋錦卷き抱き
迎ふる雲の穗に乘りて
振りかへりみる鬼怒山媛
はじめて仰ぐ天女の面わ

御衣も御髪も悉く
黄金の光眼を射る

黄雲ながく尾を引きて
黄金の瀲漪湖に搖り
金線繁りぬ玉松の葉
掌大の花咲き滿ちて
芳悉く金覆輪

花瓣重く傾きて
甘露の水の滴るを

啜りて醒めぬ悲しき樵夫
ふとしき樫の柄も朽ちて
大地に斧は錆びつきぬ
身を沒したる雜草に
穗向の風の騷立ちて
我を駭く湖畔の夕

下

秋の朝雲あさ燒くる
眞日の光の奇異しくも

あめつちなべて黄變(わうへん)して
草もゆるがぬ日を一日

暴風來りぬゆゆしきかも
大樹を摧き石を飛ばし
八つ峰(を)嚴しき鬼怒沼山
爭ひかねて靡かむとす

山ふところに吹き付くる
雲のちぎれの雨に凝り
沛然として降る三日

土洗はれて山瘦する
どうどうとして石相搏(う)ち
底鳴り震ふ水の勢(きほひ)
相交はれる山の尾も
押し諸向(もろむ)けて激(たぎ)ち去る

剩雲いまは收るや
見る目悲しきふところに
うつしく殘る家一村
恐怖に籠る樵夫が伴

竊にいたむ人の身の上

萱の茂りを刈り燒きて
すなはち作る稗の穗を
七たび伐りぬ山の秋
落葉に拾ふ橡の實を
確にくだきて澤にひて
七たび造りぬ橡の味噌

鬼怒沼山に斧とりに
ゆきて聞えぬ人を悼み

秋さり毎に物を供へ
まつり營む人のまこと

蔓の黃葉を眞探りて
おどろがさ枝に蕷を堀り
霜に赤らむ梢の柿
澁きを榾の火に燒きて
人のまことは物を供へ
まつりいとなむ淋しき夕

蓬髮ながく肩に垂れ

垢つく衣朽ちたるに
窶れしかひなな杖つきて
柄もなき斧の錆びたるを
葡萄の蔓に抜き負ひて
よろぼひ渡る藤の棧橋
あやしむ人をあやしみつつ
樵夫はいまぞ還り來れる

明治三十九年

女あり幼にして母を失ひ外戚の老婦の家に成長せり、生れて十七、丹脣常に微笑を湛へて嘗て憂を知らざるに似たり、之を見るに一種の感なき能はず、乃ち爲に短篇一首を賦す、

母があらば、裁て着すべき、鬼怒川の待宵草、
庭ならば垣がもと、雜草もまじへずあらんを、
淺川や礫がなかに、葉も花も見るにさびしる、
眞少女よ笑みかたまけて、虚心たぬしくあら
めと、母なしに汝が淋しる、見る心から

麥踏む農婦を見て詠める歌

箒もて打たば捉るべき、蜻蛉なす數なきものに、己さへ思ひてある、貧しきは暇をなみ、冬墾りと麥のうねうね、鍬もて背子が打てば、をみな子の乳子を抱かひ、家に置かば守る人なみ、笠床と卯つぎがしたに、獨り置かば凍えすべなみ、暖き肌に背負ひて、七たびも踏むべき麥と、腿立ちの踏みの搖すりに、こころよく乳子は眠りぬ、往還り實にし踏めば、薄衣まとへどぬくく、粟も稗も餓ゑばうまけむ、あきつなす數なきものに、自らも思ひあ

れば、世をうけく思はずあらめと、人の身を吾はいたみぬ、見るたびことに

利根の河口は亂礁常に波荒て舟行甚だ沮む、唯暗礁あかべ鹿根の二島の間僅に平靜なり、大小の船舶皆之より出入す、故に風威一たび加はれば復た近づくべからず、此邊一帶の濱漁人の命を損するもの年に幾十を以て數ふといふ、一月二日寒風凜烈一船底を破りきと傳ふものありければ、

利根川や八十河こめて、遙々に濶きながれの、川じりゆ吐き出づる水を、逆むけて打ち寄る

波は、和のよき日にも搖れども、おも揖はあかべが島と、下總のつめの守部、とり揖は鹿島根が巖と、常陸のはての守部に、波ごもりたぐふ二島、二島のひまのなごみに、眞白帆を掛けのつらなめ、鮪舟あさ行きしかど、かへり來る灘のあらびの、速吸の潮のまにまに、過ちて巖に觸りけむ、そこすぎば安けむものを、速吸の潮のまにまに、其舟をあはれ

蜑が家に蛸の生きたるを見てよめる歌

天地の未だ別れず、油なすありけむ時に、濁

れるは重く沈みて、おのもおのも成りけるなかに、なりざまの少し足らざる、蛸といふは姿のをかしく、動作のおもしろきものと、漁人の沖に沈みし、蛸壺に籠りてある時、疣自物曳けども取れぬを、蛸壺の底に穿てる、其孔ゆ息もて吹けば、駭きて出づといふ蛸の、ここにして桶の底ひに、もそろもそろ蠢きてあれば、ほとほとに頭叩き、おもしろと我打てば、うつろあたま堅くそばたち、忽ちに赤に醉ひたるは、蓋しくも憤るならし、眼もくちもおもしろ、蛸といふものは

お伽噺に擬して作れる歌

犬蕨しぬにおしなべ、雲積める山のなだれに、
杉の葉をくひつつある、兎等に猿のいへらく、
なにしかも汝が目は赤き、汝が耳は恐れのし
るし、溪をだに出でがてにするを、枝渡り空
行くことの、我が儕はしかぞかしこき、斯く
いへば兎いへらく、山媛の我をめぐしと、石
楠の花をつまみ、豆梨の花をつまみ、豆梨を
口に吸ひ、石楠を口に吸ひ、我が目らに塗ら
せりしかば、美しくしかぞ成りしと、いへる

時山毛欅のうつろに、潛み居し小兎いはく、
誇らひて汝はあれども、蛸とるとありける時、
鱶の來て臀くひければ、室の樹の枝に縋りて
七日まで泣きてありしゆ、汝が族臀は赤く、
汝が族木傳ひ渡り、汝が族しかぞ喧し、然か
も尙ほこらひ居りやと、小兎のいへりしかば、
憤り猿跳り來、爪立てにつかみかかれば、枝
攀づる業は知らざる、愚かしき兎が伴は、眞
白毛や雪深谷に、まがひけるかも

幼少の折に聞きけることを思ひ出でて

粗朶の、あら垣や、外に立つ、すぐなる柿の木、植竹の、梢ゆれども、さやらぬや、垂れたる枝、梯もてど、届かぬ枝、其枝に、鹿吊りて、剝ぎたりと、老ぞいふ、其老が、皮はぎし、總角に、ありし時、抱かえし、肩白髪櫓掛け、猪も打ちきと、いへりきと、老ぞいふ、すぐなる、澁柿の木、澁柿は、つねになれど、小林は、陸穂つくると、蕎麥まけど、荒もせず、あら垣や、粗朶がもと、たまたまも、鼬過ぐと、紅の、芥子散りぬ、箒草、こ

ぼれがなかへ、はらはらと、芥子散りぬ

明治四十年

雲雀の歌

春の野に群るる神の子、
黄金の毛を束ねたる、
小さなる箒もて、
手に手に立ち掃きしかば、
綠しく麥の畑に、
黄金の菜種の花は、
眞四角に浮きてさき出ぬ。

白玉のつどひの如き、
神の子は戯れせむと、
其花の筵の上を、
ふはふはと飛びめくれば、
柔かく濕めれる土に、
ほろほろと止まず花散る。
其時に神の子一人、
硝子の管をつけたる、
白銀の長き瓶より、
噴き出づる瓦斯を滿たしめ、
風船玉空に放てば、

そを追ふと神の子あまた、
碧なる空のなからに、
其の玉を捉へ打ち乘り、
あちこちと浮きめぐりつつ、
括りたる白絲解きて、
其玉の縮まる時に、
ふはふはとおりもて來ると、
風船玉やまず放てば、
飛びあがり飛びあがりつゝ、
餘念なく戯れ遊ぶ、
斯る時神の子一人、

蟲あさる雲雀みいでて、
こそばゆき麥の莖に、
搔きさぐり一つ捉り來て、
小さなる嘴をあけ、
白銀の瓶の瓦斯を、
其腹に滿て膨らまし、
すらすらと空にあがりて、
小さなる其嘴より、
少しづつ吐かしむる時に、
囀りの喉の響は、
針の如つきとほし來ぬ。

菜の花の筵に立ちて、
めづらしむ神の子なべて、
おのがじし雲雀とると、
追ひめぐり羽打ち振れば、
麥の穗に白波立ちて、
さきへさきへ波は移りぬ。
かくしつつ神の子ぼもは、
悉くまひのぼれば、
うららかに懶き空に、
滿ちわたる輕き空氣は、
左右縱に横に、

こまやかに振動しつつ、
畑打の耳握りて、
響は止まず。

獨

一

とととと喚べば馳せ來て、
麥糠にふすまを交ぜし、
餌箱に嘴を聚め、
忙しく鷄は啄む、

そを見つつ庭に立てば、
家のうち人もなし、
母は今外に在り、
父共に外に在り、
芋植うる曩の日行きて、
芋植ゑて既に久し、
三人なる家族なれば、
唯一人我は殘れり、
掛梯子昇り行き、
藁の巣に卵うみて、
牝鷄の騷ぐ時、

寂しさは纔に破る、
つれづれと永き晝、
遠蛙ほのかなり、
濕りたる庭のうち、
はらかに辛夷散り、
手桶なる茄菜の中に、
菜の花の匂へる見れば、
世の中は春たけぬらし、
我は只一人居り、
つつみある身をいたはりて、
我が母は外に在り、

すこやかに今なりて、
歸らむと思へば嬉し、
口髭は常剃りしかど、
剃らざれば延びにけり

二

垣隣人をよびて、
口髭を剃らしむれば、
松葉もてつつくが如し、
芥子坊主剃り殘されて、
只泣きに泣きし此の方、

斯くばかり疼きことなし、
こそばゆき顎をさすり、
春日さす縁に立てば、
ぱらぱらとジョン馳せ來つ、
午餐する茶を沸すと、
草取りに畑に行きし、
下婢は今かへり來らし、
縁側に足を掛け、
我を見るはしき犬、
煎餅をもて行けば、
前足を胸に届め、

後足に立ちながら
ワンといへばワンと吠ゆ、
板の間の猫の皿を、
ことことと雞のつつくに、
ししといひて我が立てば、
忽ちに雞追ひ立て、
竹藪に迫め騒がし、
尾を振りて我が許に來る、
桑畑へ鎌もて行く、
草取りと野に行けば、
桑の木の枝移り鳴く、

頰白に吠えながら
先へ先へ駈けめぐると、
人ならば草臥(くたび)れむ、
砥(と)を立てて鎌を研(と)ぎ、
草取の復た行くを見て、
ばらばらと馳せ行くを、
煎餅もて喚べは戻り、
煎餅の竭(つ)きし時、
ジョンジョンといへど還らず、
木瓜の葉は花を包みて、
山吹も今は盛りに、

静かなる眞晝の庭、
はらはらと雀下りて、
其處此處とあさりめぐる、
明日は又雨なるべし

俳句

白菜や間引き〳〵て暮るる秋
七年の約を果すや暮の秋
散りぬべき柳の秋の毛蟲かな
花煙草葉を搔く人のあからさま
藁灰に筵掛けたり秋の雨
豆引いて莠(はぐさ)はのこる秋の風
わかさぎの霞が浦や秋の風
佐渡について母への狀や秋の風
蓼の穗に四五日降つて秋の水

此村に高音の目白捉へけり

鳴きもせで百舌の尾動く梢かな

柿くふや安達が原の百姓家

柿赤き梢を蛇のわたりけり

芝栗や落ちたるを拾ひ枝を折る

錐栗(ひよひよぐり)やここに二つを珍らしむ

芭蕉ある寺に一樹の柚子黄なり

一うねは桐の木陰の黄菊かな

わせ刈つて鷸の伏す田となりにけり

狼把草(たうこぎ)の花さく頃や稲日和

掛稲の下や茶の木の花白し

飛彈人の木を流す谷の紅葉かな

蟲ばみし櫻なりしが紅葉かな

松間やほがらかにして櫨紅葉

胡麻干すや實勝になりし木芙蓉

茸狩や櫨の紅葉に來鳴く鳥

足もとに光る茸や夜山越え

木瓜の子(み)や葉は皆落ちて秋の霜

稻を扱く藁の亂れや赤蜻蛉

南禪寺所見

亂れ伏す小萩がしたや鮑屑

霞が浦

白帆遙にわかさぎ船や蘆の花

格堂除隊

營を出てさやかに秋の瀨戸の海

秋水は輩せり

我喚ぶを後も向かず秋の人

——明治卅七年——

增補

潮

三月二十六日常陸多賀郡水木濱にあそびて

大甕の水木の濱に潮滿つといたぶる浪に搗布(からめ)
さはとる

潮さゐの水木の濱に爪木(つまき)たく蜑人さわぎかち
めとるかも

水木の濱そなれの椿しげけれど潮風寒み咲き
のともしも

濱風のなびけの椿小枝枯れ見のさびしもよ花は咲けども

おなじく二十七日水木より久慈郡に越ゆる途上

もののふの眞弓の山は春雨のなかに越ゆれど潮の音聞ゆ

あられふり鹿島の浦の松原にあなさゐさゐし鳴潮の音

白檀弓矢刺の浦に人居滿ち潮のなごみに網引する見ゆ

——以上明治三十五年——

再補遺

初期の歌

長塚氏の同窓の友であつた瀧口述氏から小布施順次郎氏を經て長塚氏直筆の歌稿一綴を送られた。歌稿は改良半紙八枚一綴で歌數が七十五首ある。字體は草體で一寸見ると女が書いたのではないかと思はれる程纖細である。而してよく見ると其のうちに矢張り晩年の書體の面影を認める事が出來る。瀧口氏の說に據ると是等の歌は明治二十九年あたりのもので、長塚氏がまだ中學校に居た時分だと云ふことである。（大正四年齋藤茂吉記）

菫（四月廿三日）此日東京に赴く

ひとよ寝しあしたの風は音せねど霜にしをる
る花菫かな

清水谷公園にて（五月五日）

風ふけばそれかと人の影みせて心まどはす青
柳のいと

亀戸にものして

朽ちはてし去年の落葉の下に萠えてひとり花
咲くつぼ菫かな

卯花浮水（題詠五月三十一日）

さと川や馬ひき入れしあとならし浮ぶうつぎ
の花のたえまは

折にふれたる（五月十七日）

人訪はぬ小笹が原を分け行けばただ露のみぞ
散りまどひける

近郊遠足に出で小澁谷を過ぐ（五月九日）

竹伏して水も見分かぬ澁谷川音せぬ風の來て
は行くかな

岸に藤あり（同日）

岸のべの折れ伏す竹にまどひつつ澁谷の川に
寄する藤波

深夜夏月（題詠五月十二日）

瑞枝さす青葉が上に澄めれども更け行く月は

見る人もなし

野撫子（題詠五月十二日）

心なき野守が宿の蓬生に苅り殘されし撫子の
はな

梅雨（五月三十一日）

かやぶきの軒の雫のひまをなみ開けぬとぼそ
に日も暮るるかな

山上觀望（五月三十一日）

まぐさ刈る麓の原は木がくれて思はぬ方に立
つ烟かな

梅花浮水

里の子が遊びしあとも著（しる）くして小川の岸に梅
ぞ散り浮く

枯野

打わたす木々の下草すすき原野べは色なくな
りにけるかな

春雨

あわ立ちて今朝は流るる里川の柳つのぐみ春
雨のふる

早春野色

賤の男も稀には見ゆる麥はたに專（もは）ら雲雀のあ
さる頃かな

夕烟（四月廿五日）

一もとの帆柱見えて川添の笹原のぼる夕烟かな

伏木といふを過ぐ（六月下旬東京途上）

四手網引くや翁が手すさびに水せきとめし里のささ川

江戸川所見

岸のべの水のよどみに柱立てさしぬる庵や漁師が宿

歸途汽車をかりて松戸附近を過ぐ

おしあくる車の窓をふきすぎて小田の榛原わたる夕風

六月中旬汽船にてかへる

夜をこめて舟うつ波の音高みまろ寢の夢のえさそ結ばね

夜明く

あまぐもはさながら深くとざしゐて佗しき空を夜は明にけり

沿岸矚目

住み棄てし堤の庵は傾けど道ゆく人の雨や避くらむ

うなゐの子を先立てて行く夕暮の野べの末より立つ烟かな

遠山雲

朝まだき西の群山雲おほひぬやがても風の吹かんとすらん

萍（五月十二日）

寄せかへす波に任せて浮草は憂きこと知らに生ひ茂るかな

筑波山に登りて（十二月廿八日）

筑波ねは身にしむ風も吹かねども集めてぞ見る雪の山々

樹蔭に入る（三月八日）

人訪はぬを暗きなかに一人ゐて哀れ木の間の月を見るかな

仙湖小波（三月八日）

月かげをおぼろながらに碎きつつ小波ぞ立つせはの湖

小佛嶺の麓千木良を過ぐ（六月十二日）

里の名にかけてぞ我もちぎらばや山坂道をまたも越ゆべく

六月十一日甲州に行く途上高雄山に登る

高雄山峰の木立は深くして杉のうつほに鳥が

音ぞ啼く

（アララギ第八卷第六號より）

青木轍兒氏よりうつろ舟の來歴知せ來れるに返せるはがきの末に記せる歌（編者記）

まかがやく金色姫がなりしとふくはし桑子の神ものがたり

（明治卅四年四月十五日はがき）

つゆ霜箱

あくる日の次の日は筑波にのぼりたまふよしきこえ侍りしかども、雨のかつふればそれもおぼつかなくおぼゆるに

つくばねに明日のつぎの日い行かむと明日の日ふらば行かぬものかも

おぼろげにはあれども、山のみえわたりたればつくばねは雨のふる日はみえなぬといへどももとな見ゆらくも怪し

（ふらば、はれぬべくおもへば）